

国語科における習得・活用を意図した授業のあり方

石田 明美
国語科 端 名 秀 雄
清 水 絵里奈

1. 国語科における習得・活用を意図した授業について

(1) 新学習指導要領国語について

新しい中学校学習指導要領国語には、次のような特徴がみられる。

- ① 「言語活動」の充実
- ② 「交流」についての指導事項が追加
- ③ 「伝統的な言語文化」の尊重
- ④ P I S A 調査・全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた指導事項の追加

① 「言語活動」の充実

「言語活動」の充実は、今回の改訂におけるポイントの一つである。国語科のみならず、教科の枠を越えてすべての教科で取り組むべき課題として盛り込まれている。もちろん、その中核となるべき教科は国語科であるが、国語科の中でも「2内容」の(2)として「(1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする」というように、「言語活動例」が明記された。

② 「交流」についての指導事項の追加

例えば第1学年の「2内容」「A話すこと・聞くこと」アには、「……話し合ったりするための材料を人との交流を通して集め整理すること」とある。また、「B書くこと」には、3学年ともに「書いた文章を互いに読みあい」という表現がみられる。情報交換や意見交換を積極的に行わせていこうという意図がうかがわれる。

③ 「伝統的な言語文化」の尊重

内容の区分は3領域1事項で従来通りではあるが、これまでの「言語事項」が「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」となり、古典の指導に関する内容が具体的にその中に盛り込まれている。

④ P I S A 調査・全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた指導事項の追加

O E C Dによる生徒の国際学力到達度調査(P I S A 調査)や、文部科学省による全国学力・学習状況調査の結果を踏まえて、不十分だと判断される能力、国語科の場合には特に「読解力」の育成を意識した内容となっている。例えば、第3学年の「C読むこと」の(2)言語活動例には「物語や小説などを読んで批評すること」というように、P I S A 調査で求められたクリティカルな読み(批評的な読み)が明記されている。

また、学習指導要領の文言の中に明記されているわけではないが、上記の調査結果を鑑み、基礎的・基本的な知識・技能の習得とそれらを活用することによって思考力・判断力・表現力等を育成することが求められている。

(2) 習得・活用を意図した授業について

「習得・活用を意図した授業のあり方」をサブテーマとして研究・実践を進めるにあたり、金沢大学准教授の折川司先生に指導・助言をしていただくことにした。

まずは、「習得」と「活用」についてであるが、新学習指導要領の各学年「2内容」の「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」それぞれの(1)「……の能力を育成するため、次の事項について指

導する」に記載されたいわゆる「指導事項」の内容が「習得」すべき基礎的・基本的事項に相当し、(2)の言語活動例が思考力・判断力・表現力等を育成するための(1)の「活用」例であるととらえた。

折川先生からは、学習指導要領に沿った研究・実践はどこでも行われるものであり、附属学校の研究・実践としては物足りないのではないかという指摘があった。

その上で、学習指導要領には具体的に記載されていないが、実際の学習指導の際には必要となるいろいろな力があるのではないか。そのような力を、教師が考えるだけでなく生徒たちからも引き出して明らかにしつつ（習得）、それらを学習活動の中で活かしていく（活用）ことができないか、というアドバイスをいただいた。

これを受けて、国語科で研究の方向性を模索した。学習指導要領には記載されていないが、学習指導で必要となる力、いわゆる学習指導要領のすき間を埋める力。日頃の学習指導では意識してはいないが、そのような力はかなりあるはずである。

しかし、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」それぞれの領域によって、また、同じ領域であっても扱うものの内容によって必要とされる力は異なってくると思われる。それで、あえてあらかじめ必要と思われる力を教師側で洗い出したりはせずに（この点に関しては、折川先生のアドバイスにもあるとおり、生徒たちから引き出すことにも意味があると思われるため）、とりあえず実践ありきで試行してみることにした。

2. 国語科における習得・活用に関する本校生徒の実態

授業実践の具体的な内容は次章に掲載するが、2年生は文学的文章（「ゼブラ」光村図書2年）で、3年生は俳句（「俳句の可能性」光村図書3年）で授業を行った。

2年生の実践では、文学的文章の読解に「批評的な読み」を加えてみた。批評的な読みは前述したように、新学習指導要領の中にも第3学年の「C読むこと」の(2)言語活動例に「物語や小説などを読んで批評すること」という記述があるが、それを2年生で実施してみることにした。

文学的な作品に関しては、いわゆる心情を中心に読み取る学習を行ってきた生徒たちが多いためか、初めのうちは「批評的な読み」という視点に対して戸惑いを見せる生徒たちが多かった。しかし、視点を明らかにしてやると、少しずつ生徒たち自身で「批評的な読み」が可能となっていく。作品の内容を把握する丁寧な読みを「習得」、それらを踏まえた批評的な読みを「活用」と位置づけると、2年生では新たな視点での「活用」という点で不十分さを実感した。

3年生の実践では、「俳句」を鑑賞にとどまらずに、新学習指導要領の（第2学年の「B書くこと」の言語活動例「詩歌を作ったり」）を応用させた「創作」にまでつなげ、生徒たちが作った作品をいくつかの観点で相互評価させ、自分が意図したことと受け止められ方の違いなどを自覚させた。そのような活動を通して、言葉の持つイメージの豊かさや奥深さ、表現のしかたの難しさなどを感じ取らせた。

名句の鑑賞によって表現方法等のポイントを学んだことを「習得」と位置づけ、それらを応用した生徒作品の相互評価や創作を「活用」と位置づけた。また、本単元で「習得」した「俳句」に関する知識・技能を、後期の古典学習「おくのほそ道」で「活用」する方向でも考えている。

3年生はこれまでに習得してきた知識・技能の量は豊富である。しかし、課題解決の際、どんな習得事項をどのように「活用」するかを意識させた経験は少ない。「俳句」の単元では「習得」したことを意識させた上での創作・鑑賞という「活用」を行なったが、結局は教師側の与えた活用の型にのっとった形にすぎず、生徒の主体的な「活用」とまではいかなかった。後期の古典学習では、「習得」したことを生徒自らが模索しつつ「活用」できる場面を設定したい。

3. 国語科における習得・活用を意図した授業実践例

実践例1 (2年生)

批評的な読みを取り入れた文学的文章の指導(「ゼブラ」光村図書2年)

端名 秀雄

「ゼブラ」(光村図書2年)は、アメリカの作家ハイム・ポトクの作品を金原瑞人が訳した短編小説で、ゼブラというあだ名をもつアダム・マーティン・ゼ布林という男の子が、ベトナム戦争を体験した美術の非常勤講師ウィルスンとの出会いによって成長していくというストーリーである。

この2人に関わりのある人物として、ゼブラの親友でそばかすとめがねの女の子アンドリア、ウィルスンの親友でベトナム戦争で戦死したレオン・ケラーなどが登場する。

本実践のポイントは、この作品で批評的な読みを取り入れたということである。

まず、初読後にワークシートを配布し、次の2点について書かせた。

- ① 作品の内容について、感じたことや疑問に思ったこと。
- ② 作品の描き方について、気がついたことや疑問に思ったこと。

①についてはさまざまなものが出てきたが、②については「アダムとウィルスンの両方が左腕を負傷している」というものが出てきたただけであった。これらのことから、生徒たちはこれまで作品の内容について考える機会は多かったが、作品の内容や描き方を評価するような読みはほとんどしてこなかったのではないかと考えられた。

文章読解の順序としては、PISAの読解の3つのプロセスに従い、A情報の取り出し(作品中の情報を正確に取り出す)、B解釈(本文を根拠にして推論する)、C熟考・評価(文章と自分の知識や考え方や経験を結びつける)で行った。

また、A・Bのプロセスにおいては、「マインドマップ」(*注1)を活用した。

(1) 情報の取り出し

作品を読んだ後、マインドマップを活用して登場人物を確認させた。マップの中心をアダムとし、そこから関係のある人物の枝を広げさせた。登場人物に関わるものも、人物から分かれる枝としてマップに描き込ませた。例えば「ヘリコプター」、「しま馬」、「絵」などが登場した。関係がうまく示せたものを参考資料としてクラス全員に配布し、作成した生徒に解説をさせ、自分が描き足りなかった部分はそれを参考にして補足させた。

単に登場人物を列挙するだけでなく、それぞれの特徴や関係、そして人物に関係のあるさまざまなものも示すことができ、人物を中心として作品に関わる情報を把握できたという点で効果的であった。

ただ、マインドマップのポイントの一つが絵を描くことであり、人物を描く必要があることから、苦労している生徒もかなりみられた。

(2) 解釈

(1)の情報の取り出しのマインドマップの中に登場したものの中から、作品の解釈に重要だと思われる次の5つを取り上げ、それらについて再びマインドマップを作成させた。(4人一班で共通のものを2班ずつ、全部で10班)

- ①ゼブラ(しま馬) ②ヘリコプター ③アンドリア ④ウィルスン ⑤フランクリン通り

① ゼブラ (しま馬)

この作品で、しま馬がどのようなものとして描かれているのかを考えさせようとした。作品の題名であり、アダムのあだ名であり、アダムの描いた絵の中でヘリコプターといっしょに飛んでいるものでもある。アダムを象徴しているものとも言えよう。

② ヘリコプター

ベトナム戦争でウィルスンが操縦していたものである。アダムが作品のモチーフとして何度か用い、その作品が光り輝いたり、スロットル全開で今にも飛び出しそうになるという描写もある。ウィルスンを象徴するものであり、なおかつアダムの心境を反映しているものでもあるということに気づかせたかった。

③ アンドリア

そばかすとめがねという風貌の特徴はもちろんのこと、アダムとの会話の一語一語にも注目させ、性格についても考えさせた。アダムに寄り添いながら、アダムが変化していく様子を確認してくれている人物と言えよう。

④ ウィルスン

他の人物との関係だけではなく、美術の非常勤講師としてアダムにどのような影響を与えたか、ベトナム戦争に参戦している人物であるという側面からも考えさせた。アダムにももの見方を教えてくれ、自信を与えてくれた人物である。

⑤ フランクリン通り

人物にばかり目がいきがちな生徒たちに、別な視点のものも与えてみた。走るのが大好きだったアダムがお気に入りの場所であったが、交通事故に遭いトラウマになっていた場所である。しかし、ウィルスンとの出会いで一回り大きくなったゼブラが決意を新たにする場所でもある。

(3) 熟考・評価

(1)情報の取り出し、(2)解釈を踏まえて、作品の熟考・評価を行った。熟考・評価に関する課題は、初読後の感想ではほとんど出てこず、慣れない生徒たちに設定させるに無理があると考え、教師側で準備し、ワークシート形式にして配布した。

作品の評価に関する課題を7つ用意し、それを生徒各自が考えた作品の主題と結びつけて考えさせてみた。

ワークシートの設問は次の通りである。

「★この作品の主題（作者が読者に最も伝えたかったこと）はどのようなことでしょうか。」

この設問に対する答えは、決めつけることはせず、生徒それぞれの自由な発想にゆだねた。「人はつらいことがあっても、何かをきっかけにして必ず立ち直ることができるということ」というようなものが多かった。

「★その主題を読者に伝えるために、この作品の描き方で次のどれがいちばん役に立っているでしょうか。一つ選んで番号を書き、主題とどのように結びついていると思うかを説明しなさい。」

ここからがこれまで生徒たちがほとんど考えたことがなかったと思われる評価的な設問であり、熟考を要する部分である。作品の内容あるいは作品の描き方に関する特徴で、これらをどのように評価させようか悩んだ末、「情報の取り出し」「解釈」を総括する作品の「主題」を読者に伝えやすくしているものはどれかという発想で考えさせてみることにした。上で述べたとおり、「主題」は生徒それぞれの考え

にゆだねた。似たような主題であっても選ぶ項目が違ったり、主題がぜんぜん違っていても同じ項目を選んだり、興味深い結果となった。

設定した評価的な視点と意図

① 「ゼブラ」という題名になっていること。

この作品にとって「ゼブラ」という題名がふさわしいかどうか、他にふさわしい題名があるとしたらどのようなものがあるか、という発想で考えさせようとした。

② ゼブラとウィルスンがどちらも左手を負傷していること。

今回生徒たちから出てきた唯一の作品の特徴である。共通の傷をもっていることの意味や、ややひねくれているが、これがもし右腕だったらなどという発想でも考えさせてみたかった。

③ ウィルスンが美術の非常勤講師であること。

ウィルスンがもし他の教科を教える講師だったらという発想も加え、美術講師であることの意味合いを考えさせようとした。

④ アンドリアが登場していること。

もしこのアンドリアという脇役がいなかったらどうだったかということで、この人物の必要性を認識させたかった。

⑤ アンドリアが「めがね」・「そばかす」という外見であること。

アンドリアがもし「美形」の女の子だったらという逆の発想で、アンドリアの親しみやすさを実感させたかった。

⑥ フランクリン通りで始まり、フランクリン通りで終わっていること。

「解釈」のマインドマップでも取り上げたが、フランクリン通りがどのような場所として描かれていたか、また作品の最初と最後に登場しているということの意味を再認識させたかった。

⑦ ベトナム戦争を題材にしたこと。

作品の背景に戦争が描かれていることが主題と結びつくかどうかを考えさせたかった。

⑧ その他

生徒それぞれが自由に考える主題なので、それに応じた作品の新たな特徴をあげてくれる生徒が出てくることを期待した。

生徒の選んだ番号と、実際の記入例（総数は154人）

選んだ番号

① 1人 ② 75人 ③ 17人 ④ 10人 ⑤ 2人 ⑥ 35人 ⑦ 8人 ⑧ 6人

記入例

★主題

過去にあった不幸がきっかけで大事なものを失ったからといって、人生が終わってしまうわけではない。いつまでも過去にとらわれて暗い人生を歩んでいくより、自分なりに人生を歩んでいった方がよいということ。

★番号②

ゼブラは事故によって自分の左手を失った。それによって物事を暗くとらえるようになってしまった。ウィルスンはベトナム戦争で左手と親友を失った。でも、ウィルスンは親友を思いやりながら親友の分まで一生懸命生きている。二人とも左手を失っているのに、歩んでいる人生は全然違う。そして、

ウィルスンの人生をみたゼブラが自分の人生を変えていく。このようなことが主題と結びついている。

★主題

いろいろ苦しいことやつらいことがあっても、何か自分にとって楽しいことを見つけて、前向きに生きて欲しいというようなこと。

★番号②

左手を負傷して、さらに走ることを失ったゼブラは、左手を失って、さらに親友のレオンを失ったウィルスンさんに会って、仲間のような感じがする。ゼブラは事故以来フランクリン通りを避けて暗くなってしまっていたが、ウィルスンさんはレオンの死にくじけず、レオンの分も頑張ろうとしている。

★主題

人生の中で辛いことはあるけれど、それを乗り越えて前向きに生きていくことが大切であること。

★番号②

ゼブラとウィルスンに左手の負傷という共通点をもたせることで、ゼブラとウィルスンの気持ちの持ち方の違いを比較しやすくしている。

★主題

自分に苦難が訪れたとしてもその苦難を和らげたり、助けたりしてくれる人がちゃんといるから、くじけないようにしようということ。

★番号③

ウィルスンが美術の非常勤講師になったことで、ゼブラは新しい目でものを見ることが分かり、また、特別に心ひかれるものを描いたり作ったりすることにより左手が少しずつ使えるようになり、ゼブラが明るい人生を歩むきっかけを作ってくれているから。

★主題

過去の事故など、嫌なことがあってもくよくよせず前向きに人生を歩んでいこうということ。

★番号③

ゼブラは美術の授業を受けたことで、手の周りの空間を見るということを習い、左手がちゃんとした手に見えたり、心ひかれるものを作るときに自然と左手も使っていたので、事故のことをくよくよしないで生きていこうと考えるきっかけになったと思ったから。他教科の授業では、手はそれほど重要ではないから、そのような気持ちにはならなかったと思う。

★主題

つらいことがあっても、それで立ち止まっていたら前に進めない。人生良いこともあれば悪いこともある。暗く考えるより、前向きに生きようということ。

★番号④

アンドリアは「人生そんなに暗く考えることないじゃない」と、事故の苦しみから抜け出せず暗くなっているアダムを、面倒くさがられながらも勇気づけている。アンドリアの言葉によってアダムが前向き

に変化していくことがわかる。

★主題

人は一人では成長できないということ。

★番号④

アンドリアは、ゼブラと何気ない言葉を交わしながら、こういうこともできるようになったんだよ、こういう考え方もできるよ、というようなことをゼブラに教えてくれている。ゼブラに明るく生きる希望を与えているので、ゼブラが成長するためにはなくてはならない存在だった。

★主題

心に傷を負っていても、それはいろいろなことによって治っていくものだということ。

★番号⑥

初めに出てきたフランクリン通りではゼブラが走るのを好きだということを説明していて、今では走ることができなくなったということを言っている。最後の場面ではアンドリアと一緒に歩いていて、明るい人生を歩めそうでいいものを拾えそうな気になっている。その心境の変化や心の成長をわかりやすくしているものがフランクリン通りだと思う。同じ場所で始まり、同じ場所で終わっていることにより、違いがはっきりして見えると思った。また、ゼブラとウィルスンが出会った場所もフランクリン通りなので、ゼブラにとっては意味のある場所になっていると思う。

★主題

多くのものを失っても、拾えるものがある。

★番号⑦

ウィルスンが左腕を失ったのも、親友を失ったのもベトナム戦争が原因。多くの話の軸となる部分は、ウィルスンがベトナム戦争で失ったものからきている。ベトナム戦争で親友を失うことがなかったならば贈り物を探しに行くこともなかったし、腕を失っていなかったならばゼブラに興味を持たなかったかもしれない。話の背景には常にベトナム戦争が関わっている。「何かすごく良いものが拾えそうな気がする」これはゼブラの最後の言葉であるが、ウィルスンも「良いもの」を拾いに来たに違いない。

★主題

けがや障害など、自分に他の人よりも不利な点があっても、自分は何もできないとあきらめず、いろいろなことに挑戦して欲しいということ。

★番号⑧

「傘を開こうとしたが、骨が折れていて使い物になりそうにない」このときゼブラの気持ちは、「自分は左腕が折れているから何もできない」という気持ちで、自分の状態と傘の状態を重ね合わせてみていたのではないか。でも、ウィルスンはこの傘を使って人間を作った。ゼブラはそれを見て、「こんな自分でも何かできるのではないか」と思ったと思う。その後ゼブラはいろんなことに挑戦して行って、最後には左手も少し使えるようになった。だから「壊れた雨傘」は、ゼブラが前向きな人生を歩み始めるのに役立っていると思った。

★主題

明るい人生を開くためには、過去にとらわれずに前へ一歩踏み出す勇気が必要だということ。

★番号⑧

「ゼブラが絵を描くのが下手だったということ」が一番役に立っていると思う。ウィルスンが開いた講座では、「手の周りの空間を見るんだ」と言っていたが、そこからゼブラは徐々に変化している。もしゼブラが絵を描くのがうまかったらウィルスンはそんなことを言わなかったと思うし、ゼブラもこの講座で何かを感じ取ることができなかつたのではないかと思ったから。ゼブラは「絵を描く」ということからいろんなことを感じ取り、前へ進もうとしている。

成果や今後の課題

PISAの読解のプロセスに従って、A情報の取り出し（作品中の情報を正確に取り出す）、B解釈（本文を根拠にして推論する）、C熟考・評価（文章と自分の知識や考え方や経験を結びつける）という流れで作品の読解指導を行った。A・Bの活動が「習得」、Cが「活用」と位置付けられよう。

A・Bの活動には、「マインドマップ」を使用してみたが、これも「活用」と位置付けてよいのではなかろうか。

A・Bのいわゆる作品の内容中心の読解は、本校の生徒たちは比較的良くできる。ともすれば作品を一度読んで、それでわかった気になってしまうという生徒も中にはいる。そのような傾向のある生徒たちに、取り出した情報やそれについての解釈を自分なりに視覚的に表現させるという「マインドマップ」の手法は新鮮みもあり、なおかつ生徒自身に理解した内容をフィードバックさせることができるという点でも良かったのではないかと考えている。

Cの作品の熟考・評価に関する課題は、戸惑った生徒たちが多かった。当初は生徒から出てくることを期待したが、その点ではやや期待はずれの感があった。このような視点ではこれまでほとんど作品を読んでこなかったと言うことであろう。結果的に教師側が課題を与えることになったが、一つ一つについて良いか悪いかなどと吟味させるのではなく、A・Bでの活動を活かして、自分なりに考えた主題と結びつけて評価するという方法を用いた。作品の描き方の評価を漠然とさせるのではなく、このように内容と結びつけてその効果を考えさせると、答えやすかったように思われる。

新たな方法、新たな視点での情報の「活用」について、初めは多少の戸惑いはあるが、生徒たちは順応性が高く、どのように「活用」させるかという工夫次第で、非常に効果的な学習活動が期待できるということが確認できた。

*注1

マインドマップ(Mind Map)もしくはマインドマッピング(Mind Mapping)は、トニー・ブザン(Tony Buzan)が提唱した、図解表現技法の一つである。ちなみに「マインドマップ」という呼称は、日本国内においてブザン・オーガナイゼーション・リミテッド社によって商標登録されている。

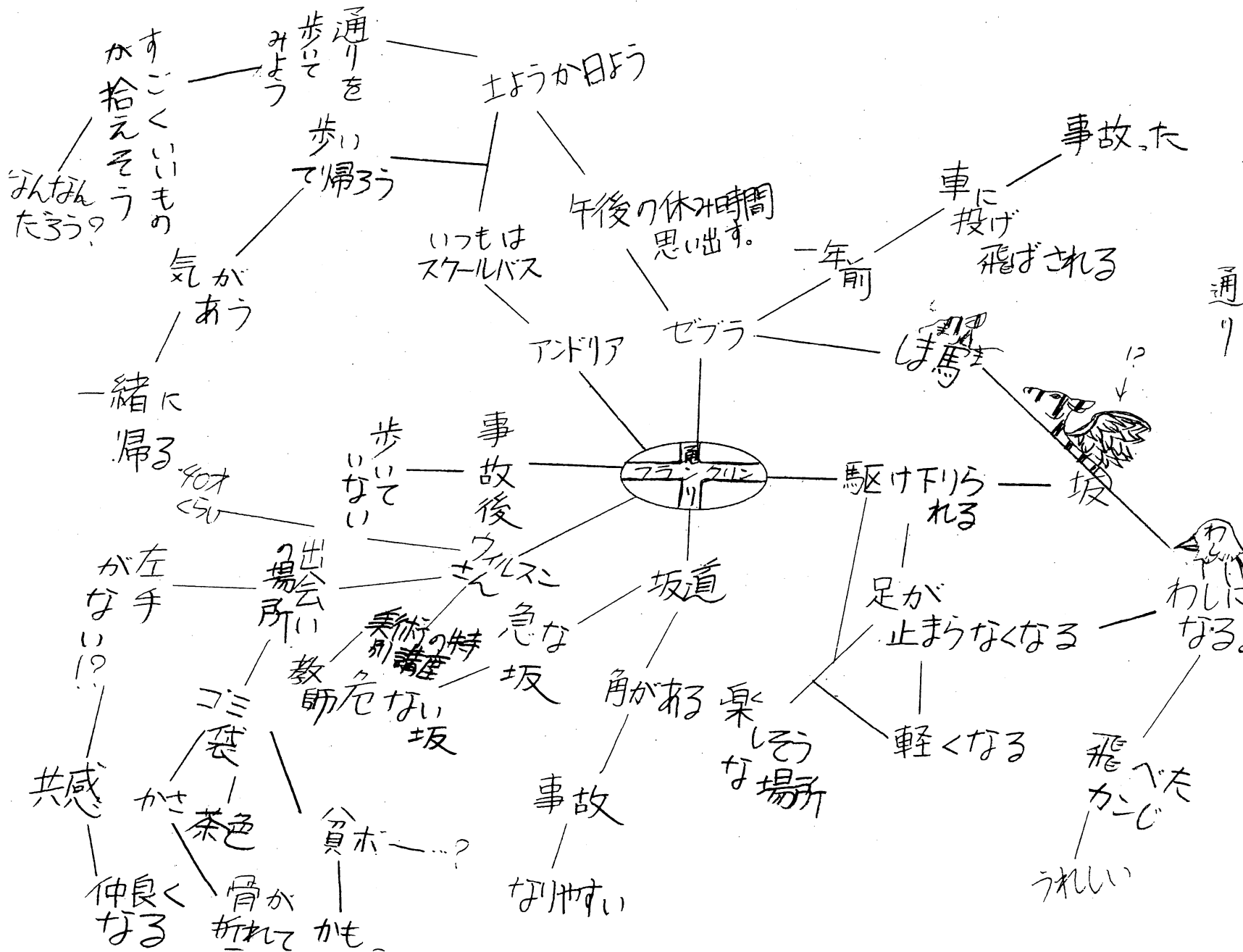
表現したい概念の中心となるキーワードやイメージを図の中央に置き、そこから放射状にキーワードやイメージを繋げていくことで、発想を延ばしていく図解表現技法。この方法によって複雑な概念もコンパクトに表現でき、非常に早く理解できるとされ、注目され始めている。人間の脳の意味ネットワークと呼ばれる意味記憶の構造によく適合しているため、理解や記憶がしやすい。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

*参考文献 トニー・ブザン著 神田昌典訳『マインドマップ FOR KIDS 勉強が楽しくなるノート術』（ダイヤモンド社）

有元秀文著『必ず「PISA 型読解力」が育つ七つの授業改革』（明治図書）

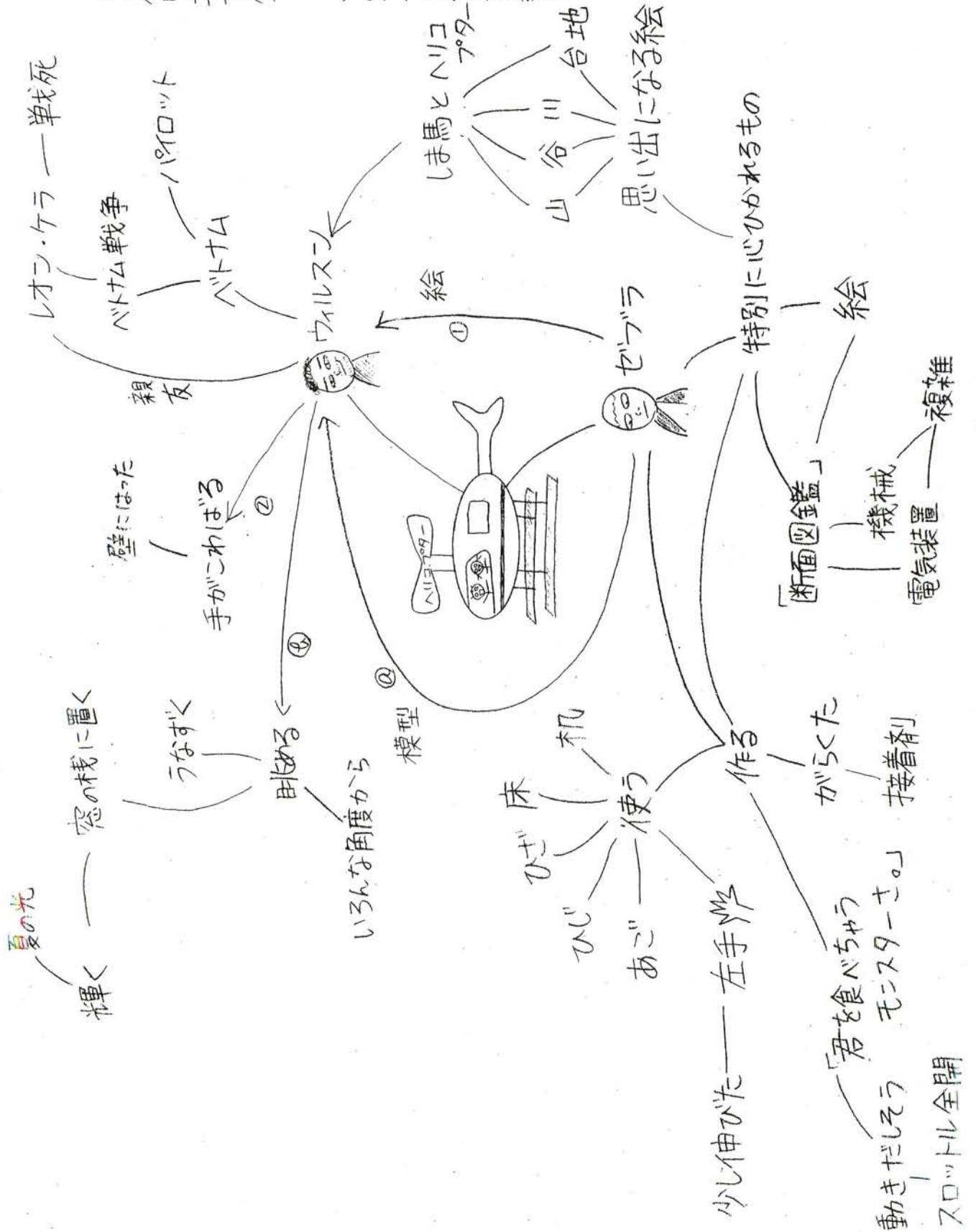
☆マインドマップの中心のテーマをここに描こう



ゼブラ

2年4組 32番

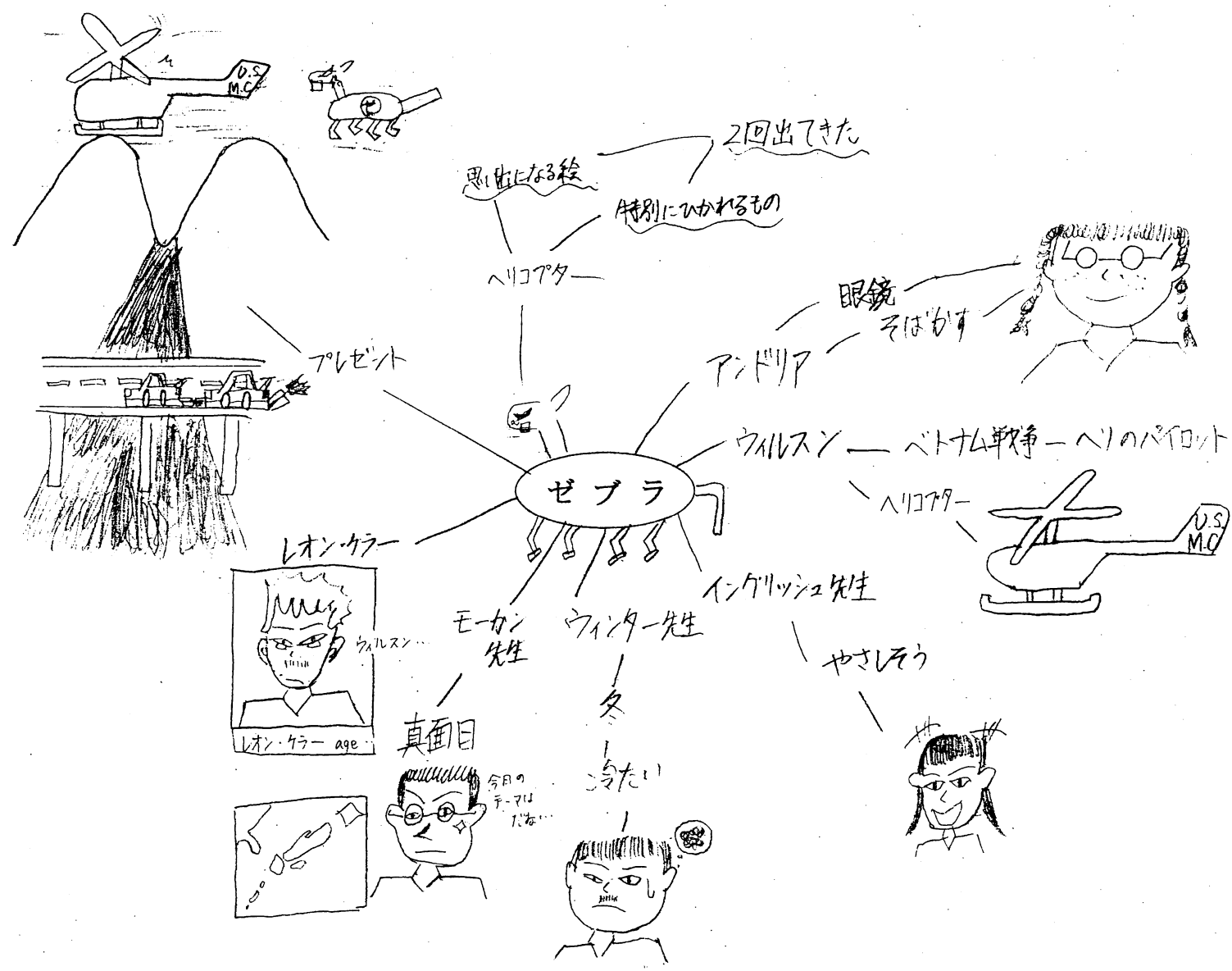
☆ (ヘリコプター) のマインドマップを描こう



ゼブラ

2年 / 組3番

☆「登場人物」やそれにかかわる「物」をマインドマップで描いてみよう。



実践例2（3年生）

習得・活用を意図した俳句の指導（「俳句の可能性」光村図書3年）

清水 絵里奈

俳句は、世界でもっとも短い形式の詩であり、日常生活の中に文化として息づき、老若男女を問わず多くの人に親しまれている詩でもある。多くの言葉を削ぎ落として辿り着いた、五七五という17音の世界は、決して矮小なものではない。寧ろ、精選された言葉から広がるイメージは無限であり、言葉の豊かさや奥深さを感じさせてくれる。本単元では、光村図書の教科書教材「俳句の可能性」（宇多喜代子）をベースに、俳句の基本的な約束事や、表現技巧に関する知識・技能を「習得」とし、それらを踏まえた上での俳句の創作や創作作品の相互鑑賞といった言語活動を「活用」と位置づけ、授業実践を試みた。

俳句に関する単元は、中学3年が初めてではない。小学校から中学校への学習の系統として、まず、小学校6年における短歌・俳句の学習では、音読によって文語の調子に親しむという活動が行われている。また、中学2年の光村図書においては、「短歌を味わう」という単元が設置されており、短歌について知るとともに、表現の美しさを味わうことがねらいとなっている。その上での中学3年の俳句の単元である。

新しい学習指導要領では、2年時において「表現の仕方を工夫して、詩歌をつくったり物語を書いたりすること」（B書くこと 2-ア）といった「創作」の言語活動例が記述されている。しかし「詩歌をつくったり」したあと、それらをどのように活かすのか、ということまでは明記されていない。3年になると、PISA型読解力の3つのプロセスにおける第三段階「熟考・評価」にあたる「批評」が大きな言語活動の柱となっており、「書いた文章を互いに読み合い、論理の展開の仕方や表現の仕方などについて評価して自分の表現に役立てるとともに、ものの見方や考え方を深めること（B書くこと 1-エ）」という指導事項とともに、「物語や小説などを読んで批評すること」（C読むこと 2-ア）という言語活動例が挙げられている。本単元ではそれらを踏まえた上、習得した俳句に関する知識・技能を「創作」及び「鑑賞」という言語活動で活用することで、17音という選び抜かれた言葉からイメージを広げる楽しさや表現の深さを味わい、言葉の力の向上に繋げるといふねらいを大きく掲げた。なお、本単元の第一次「俳句について理解しよう」、第二次「いろんな俳句を味わおう」で指導した習得事項は以下の通りである。

【習得事項】

(1) 俳句の基本的な約束事

- ・「有季定型」（「季語」を含む五七五の17音という形式）
- ・「歳時記」（「季語」を集めて分類・整理したもの）
- ・「切れ字」（俳句の中で、句の切れ目に使う言葉「や」「かな」「けり」など）と「句切れ」
- ・「無季俳句」・「自由律俳句」（「有季定型」の約束には則っていないが、俳句として認められている形）

(2) 俳句鑑賞のポイントとなる表現技巧

- ・五七五という17音への省略（省略されている部分を、自由に鑑賞する）
- ・視覚を意識した文字遣い（漢字／ひらがな／カタカナ）
- ・体言止め
- ・語順（倒置法など）
- ・言葉選び（直接表現か間接的表現か）

(1)では、教科書教材「俳句の可能性」をベースとし、俳句の形式に関する基本的な約束事を中心におさえた。その中でも「有季定型」については、表現の自由を奪う「制約」という捉え方ではなく、方向性の定まらないイメージを、ある一つの季節に限定してくれるのが季語の役割であり、17音という定型によっ

て、様々な言葉が省略されるからこそ、読み手の自由な解釈が生まれ、奥深い俳句の世界を作りだしていることを、生徒が感じ取れるように留意して指導した。また、(2)の中で特に重点をおいて指導したのは、「五七五という17音への省略」、つまり「省略された部分を自由に鑑賞する」ことである。そのねらいとして、次の二つを挙げておく。

- ①一つの正解を求めがちな受験期の生徒に、言葉から広がるイメージの豊かさや奥深さを味わってほしい。
- ②省略された部分を自由に鑑賞する活動を通して、物語の行間を読むこと、さらには、言葉には表れていない相手の心(思い)を推し量る、他者理解のスキルへと繋げたい。

第二次では、明治期以降の句を幾つかワークシート等で紹介し、その句から個々が広げたイメージをクラスメイトと共有する活動を行った。以下のA・Bは、紹介した俳句の例である。

A	ピストルがプールの硬き面にひびき
B	にんげんに少し疲れて泳ぐかな

この二つはどちらも、泳ぐことに関する俳句であるが、Aでは特に「硬き面」から広がるイメージや、水面を「硬い」という言葉で表現することで生まれる緊張感を味わった。Bでは「にんげん」という平仮名表記から広がるイメージや、「にんげんに疲れる」という表現から広がるイメージを考えさせてみた。

第三次の創作活動では、これまでに習得した俳句の基本的な約束事や表現技巧を活用して、夏の俳句を詠むことを行った。テーマは、「まだ言葉になっていない、今の自分の内面にある思いや感情」。本単元に入る前に、生徒は3年時で行った「思春期講座」で、自分の思いや感情を整理すると共に、周囲とのつながりを見つめ直すという活動を行っている。その活動も活かしつつ、自分の内面にある思いや感情を、「言葉」、ひいては「俳句」という一つの表現方法で表してみようという課題を、生徒に掲げた。(なお、この活動は美術科ともリンクしており、美術科では、同じテーマである「今の自分の内面にある思いや感情」を「言葉」ではなく「写真」で表現することを行っている。)

俳句を創作する際、活用してほしい習得事項の中でも、特に「いかに言葉を省略して余白を紡ぐか」、つまりその句を他の人が鑑賞する際に、「どれだけ省略した部分を自由に味わえる句を作るか」ということにポイントを置いた。また、すぐに17音の俳句作品というゴールに向かわせるのではなく、そのゴールに向かう前に、自分が俳句にこめたい思いや感情を、音数や字数に関係なく書き出すというプロセスを行った上で、言葉を精選し、最終的に17音という形に整えさせてみた。しかしいざ創作を行ってみると、言葉を省略していくうちに、俳句で伝えたい自分の「思いや感情」までも省略してしまい、何を伝えたいのかが俳句に残らないという生徒も見られてきた。そこで改めて、「思いや感情」は省略しないように(「寂しい」や「楽しい」とストレートに言葉に残すという意味ではなく、「思いや感情」を「込める」ことを忘れないように)という話を行い、作品創作に向かわせた。作品完成後は、色画用紙に清書を行った。

創作活動の次は、鑑賞活動を行った。これまでに習得した俳句の基礎知識や表現技巧を鑑賞という活動で活用することを意図し、クラスメイト全員の作品を紹介した上で、教師側から指定した作品を個々で鑑賞する授業を試みた。第二次では、句から広がるイメージを自由に書かせていたが、鑑賞の活動では、個々のイメージの相違点を明確にすることで、言葉の持つイメージの豊かさや奥深さに気づくねらいに近づけるため、この授業では鑑賞の四つの観点(どんな音が聞こえるか、どんな色のイメージか、どんな風景が広がるか、どんな香りが漂ってくるか)を設けた。また、鑑賞に入る前に、自分の作品について同じ観点で分析させておき、クラスメイトが自分の句を鑑賞したときのイメージの相違についても明確になるように意図した。以下は、その授業の学習指導案である。

3年3組 国語科 学習指導案

平成21年7月7日(火)

第5限3-3教室

指導者 清水絵里奈

1. 単元名(教材名) 豊かな言葉

「俳句の可能性」(宇多喜代子)

2. 目標

- ・俳句の基本的な約束事や表現技巧について理解する
- ・自分の思いを俳句という限られた音数や形式の中で表現する
- ・クラスメイトの作品を読み味わい、そこにこめられた思いを感じ取ると共に、作品を鑑賞し合う
- ・俳句を通して、言葉の持つイメージの豊かさや奥深さを味わう

3. 評価の観点及び規準

① 関心・意欲・態度

- ・作品創作や作品鑑賞にすすんで取り組み、俳句に親しもうとしている

② 書くこと

- ・俳句の形式に則って自分の思いを表現している

③ 読むこと

- ・俳句の特徴や約束事について理解している
- ・省略されている部分を自由に想像しながら鑑賞し、感じたことをまとめている

4. 指導にあたって

【単元観】

俳句に関する単元であり、教科書教材文では、俳人による句を幾つか紹介しながら、俳句の基本的な約束事や鑑賞の仕方(俳句の基礎的な知識)についておおまかに述べられている。本単元では、その教材を読みながら俳句の基礎的な知識を習得した上で、それらを活用しながら教材文以外のさまざまな俳句を鑑賞し、さらに俳句を創作することを一連の活動と位置づけた。二年時では短歌について既習しているが、三年時でさらに短い形式である俳句を学習する意義としては、その形式ゆえ精選された言葉が持つ重みや深遠さ、ひいては、十七音以外の余白部分に広がる世界までもを、味わう力を求められることが挙げられよう。言葉(文字)にはなっていない言葉を味わう、あるいは言葉を省略していくことで、言葉の余白部分を紡いでいくという活動は、日常のコミュニケーションでは、例えば「相手の言葉から、相手が置かれている状況や思いを察する」といった活動に置き換えられる。俳句は、その活動がより精選・厳選されたものといえよう。俳句という日本が誇る言葉の文化に親しむだけでなく、言葉で表現することの深さや楽しさを実感できる単元となるよう指導したい。尚、今後の展開として、自分の思いを「言葉」ではなく、今度は「写真」で表現するという美術科の活動に引き継ぐ予定である。「言葉」と「写真」、それぞれ異なる手段で自分の内面を表現したものが融合する時、果たしてどんな世界が生まれるのか、教科の枠を越えて支援していきたい。

【生徒観・指導観】

俳句に対する関心の差はあれど、生徒たちは何らかの形で、これまでに俳句に触れる機会や創作する機会があり、当然、殆どの生徒が俳句に関する知識を、多少なりとも持っている。しかし残念なことに、俳句や短歌といった詩歌の類を鑑賞する際、作品世界や言葉の深遠さを感性で味わうことよりも、受験を意識してか、正誤性ばかりを追求してしまう生徒も少なくない。そこで、俳句の鑑賞や創作にあたって、教材文から抜粋した以下の部分を重点的に習得・活用できるよう意図することとした。

*俳句が散文と違うところは、省略されている部分を、読む人の自由な解釈で大きく膨らませて鑑賞できるというところにある。

*俳句の言葉を自分の言葉として、省かれたところを自由に鑑賞することとはとても楽しく、気持ちを自在にする。

(「俳句の可能性」宇多喜代子著)

鑑賞では「省略された部分をいかに読み味わうか」、創作では「省略した結果、厳選された十七音で何を伝えるか」に力点をおき、生徒たちの言葉の感性を高める活動となるよう指導していきたい。

また、本時の創作活動においては、有季定型（季語を含む十七音という詩の形式）という俳句の基本的な約束事（季語は夏）をふまえた上で、今の自分の内面にある思いや感情を言葉で表現することを行った。自分の思いを誰かに伝えるためや、自分の思いを整理するための「表現」には、様々な手段・方法がある。しかし生徒たちは、まだまだ自分を表現する手段・方法を知らなかったり誤ったりするために、周囲とのトラブルを招いたりすることが多い。そんな生徒たちが、表現の手段・方法を学ぶ一つの機会として本単元を位置づけ、自分の思いや感情を、感性というフィルターを通して、季語を含む十七音という世界に託すという表現方法を習得し、今後の人生の中で活用できるためのきっかけとなればと願っている。

5. 指導計画及び評価計画（総時数5時限）

評価計画

第一次	俳句について理解しよう	(1時間)	③
第二次	いろんな俳句を味わおう	(2時間)	①③
第三次	十七文字で自分の思いを表現してみよう	(2時間)	
第一時	俳句を創作しよう		①②
第二時	創作した俳句を味わおう【本時】		③

6. 本時の学習（第三次中の二時）

(1) 題材名 創作した俳句を味わおう

(2) ねらい

・クラスメイトの俳句を読み味わい、そこにこめられた思いを感じ取ると共に、作品を鑑賞し合う

(3) 評価の観点及び規準

・クラスメイトの俳句を読み、省略されている部分を自由に想像して感じたことをまとめている ③

(4) 習得・活用に関する学習活動について

本時まで習得した俳句に関する知識・鑑賞の仕方を、クラスメイトの俳句を読み味わうという活動において活用する

(5) 本時の展開

学習活動・内容	教師の指導・支援及び留意点 ◇評価と方法	時間
<p>1. 本時の活動内容を知る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>クラスメイトの俳句を味わおう</p> </div>		5
<p>2. クラス全員の作品が掲載されたプリントを読む。</p>	<p>プリントには名前を伏せて作品を掲載し、このあとの活動の中で明らかにすることを伝えておく。</p> <p>教師による音読を行い、少しでも句のイメージを広げる時間とする。</p>	8
<p>3. 自分が担当する俳句（1人3句）について鑑賞し、ワークシート1に記入する。</p> <p>・鑑賞のポイント</p> <p>☆句からどんなイメージが広がるか（色・音や声・風景・香り）→ できるだけ、句のどの言葉から広がるイメージであるかについても記入する。</p> <p>☆句から伝わる作者の思い</p>	<p>クラス生徒を前もって教師側で4人×10のグループに分けておき、自分が配属しているグループのメンバー（3人）の句を鑑賞できるように指示する。</p> <p>机間巡視を行い、書けていない生徒については、書ける欄だけでも記入するよう声かけを行う。</p> <p>◇省略されている部分から感じたことをまとめているか ③（観察・プリント）</p>	12
<p>4. 4人グループに分かれて活動を行う。</p> <p>1) 各自の鑑賞をワークシート2に書き込む。</p> <p>2) 俳句を創作した本人が、自分の句の鑑賞のポイントについて説明する。</p>	<p>それぞれの活動は時間を区切って行い、教師が指示を出す。</p>	12
<p>5) 各グループで出た意見を、ワークシート2をもとに出し合う。</p>	<p>句を創作した本人と鑑賞したグループのメンバー相互間で、特にイメージが大きく異なった句について発表させる</p>	5
<p>6) まとめ</p> <p>今日の活動を振り返って感想を述べる（書く）</p>		8

(実践を終えて)

授業において、生徒たちはクラスメイトの作品に興味津々であり、自分が鑑賞する句にも真剣に向き合っていた。また、自分が創作した作品で意図したイメージと、クラスメイトが鑑賞したイメージとの相違に驚く生徒も多かった。例えば「踏み切って夏空の青ただひとり」という句は、部活動で走り高跳びをしていて、澄み切った青の中に浮くその心地よい感覚を表現した句であったが、鑑賞した3人の生徒は殆ど、「ただひとり」という言葉から「さみしい」というイメージに繋げていた。その句以外にも、自分が込めた思いが伝わらなくて残念だった、という感想を述べている生徒が何人もいたので、それを受けて授業の最後では、句から広がるイメージは個々様々であり、それが言葉の持つ奥深さでもある、と教師側で締めくくった。しかし、授業後の整理会では、「句に込められた作者の思いを感じ取る」という本時のねらいや、創作時での「思いや感情を句に込める」というねらいに則してみると、それは自由に鑑賞すべきものではないのでは、という意見があり、自由な鑑賞と作者の思いを感じ取る活動を、明確に分ける必要があると感じた。また、同じく整理会にて、「活用」の在り方として、教師が与えた型における「鑑賞」では真の「活用」とはいえないのではないか、という指摘を受けた。それに基づき、この後のクラス俳句のまとめ授業として、自分がよいと思った俳句を3つ選び、どんなところがよいと思ったかを書かせてみた。生徒が果たしてどのような観点で俳句を選ぶのか、その選び方にこそ、生徒が習得した知識・技能が活用されているのではないか、という考えによるものである。3組で、多く選ばれた作品とその観点は、以下のとおりである。なお、()内は、その句を選んだ人数である。

① 「月の下 花火見て知る 夏来たり」(10人)

【句から広がるイメージ】

- ・夏の夜に、大輪の花火を見上げている。
- ・月が照る縁側に座って、うちわであおぎながらかき氷を食べている。そんなとき、花火が空一面に広がり、夏の訪れを感じた。
- ・まんまるい月が出ている下で、きれいな花火を見て、夏がきたなってしみじみしている。

【よいと思ったところ】

- ・花火というのが、夏が伝わってきていいと思った。
- ・花火のきれいさと共に、夏の夜の暑さと、人が多く活気に満ちあふれている河川敷を思い出すため。
- ・花火が夏のイメージで、自分の中では好きな言葉(季語)なので、いいと思った。
- ・花火がすごく夏らしくて、すごくいいと思った。共感できた。

② 「宿題の 背後に響く 蟬の声」(9人)

【句から広がるイメージ】

- ・夏休みの終わり頃に宿題をしていて、蟬の鳴く声がそれをせかすように聞こえる。
- ・山積みの宿題をしているイメージ。
- ・夏休みに暑い中、窓を開けて宿題をやっていたら蟬の声がきこえた。
- ・集中しているのに、蟬の声がしてなかなか宿題をすることができない。

【よいと思ったところ】

- ・ やっても終わらないぐらい大量の宿題をしていて、集中したいのに蝉の声うるさいな〜とか、いろいろ想像できるところがいいと思いました。
- ・ 「蝉の声」というのが、暑い夏と周りの音声を表していて良いと思う。
- ・ 朝でも夜でも、宿題をしているときに、木にとまっている蝉の音が夏を象徴しているようでいいと思う。
- ・ 夏の日によくある様子を書いているけど、深く感じます。この様子がないと、夏ではない、というのが良いと思います。
- ・ 「蝉」という言葉だけで、「暑い」というイメージが分かり、よかった。
- ・ もっとも日常的な感じがして、よいと思った。

③ 「夏休み かいた汗だけ うまくなる」(6人)

【その句から広がるイメージ】

- ・ 部活などで、夏休みにたくさん練習したらその分うまくなっている。
- ・ 夏は練習をたくさんすればするほど、どのスポーツにおいても、技術・体力ともに上達する。
- ・ 暑い日が続く夏。そんな炎天下の中、スポーツの練習などをしている…やった分だけ、うまくなる!!
ということ。
- ・ 夏休みに何かを頑張って自分を磨いている様子。

【よいと思ったところ】

- ・ 暑期中、一生懸命やった証だというのがいいと思いました。
- ・ すごく共感できるし、なんかかっこいい。

④ 「風鈴と 風の音色に ウトウトと」(6人)

【句から広がるイメージ】

- ・ 朝起きてまだ眠く、ほーっとしている時に風鈴と風のそよぐ音が聞こえてくる。夏の朝の暖かさと心地よさ、風鈴の音で、ついウトウトしてしまう。
- ・ 夏の涼しげな風鈴の音と、夏風の気持ちいい音によって、眠たくなっていく夏休みの風景が浮かぶ。
- ・ 暑期中、風鈴の音と風で涼しさを感じ、気持ちよくなったという風景。水色のイメージ。

【よいと思ったところ】

- ・ 「風鈴」や「音色」など、やわらかいイメージの言葉があるので、「眠たい」気持ちが表現されているな、と思いました。最後が「と」で終わっているなので、余韻があると思いました。
- ・ 風鈴の音色に加えて、風の音色としているところから、風が吹いていることが感じられていいと思った。

句を選んだ理由として、①～④のすべての句に共通しているのは、自分の体験をどれだけ呼び起こす句、つまり共感できる句であったか、ということである。自分が体験しているだけに、イメージしやすい句、つまりイメージを広げやすい句であったとも言えよう。また、②の波線部分は、本単元で習得することをねらった「省略した部分を自由に鑑賞する」、「言葉の持つイメージの奥深さや豊かさ」を味わうことが、特に活用されたと思われる箇所である。イメージの広がり生まれる句や言葉を、良いと批評する意見であり、クラス全体では、約3分の1の生徒が、自分の選んだいずれかの句について、そのような批評を行っていた。この3分の1という数値は決して高くはないが、同時に書かせた単元の振り返り（以下に幾つかを掲載）においては、殆どの生徒が、省略した部分を自由に鑑賞する楽しさや、言葉の持つイメージの奥深さや豊かさ、または難しさを感じたという内容を書いていた。後期に行う古典教材「おくのほそ道」において、松尾芭蕉の俳句を鑑賞する際、本単元で習得したこと（本単元では活用と位置づけた創作や鑑賞も含めて）がどのように生徒自身が活用できるのか、またどのように活用を意図して授業を行うのか。本単元で得られたものを活かしつつ、研究を進めていきたい。

【感想】

- ・余白が多くある俳句は、読んで考えていくほどすごくおもしろかった。俳句のおもしろさが少し分かった。擬人法を使っている俳句はすごくおもしろかった。
- ・自分の句（扇風機機の後ろで風そよぐ）は、ほとんどの人が自分と同じイメージを持ってきてよかったと思う。しかし「扇風機」と「机」で、暑い夏に机で勉強していると簡単に分かってしまい、余白の部分が少なくなってしまい、残念だった。
- ・季語も使い方によってはまったく異なった意味の俳句ができることを実感した。
- ・自分の思いをたくさん書いて、それを「余白」を作るために省略して、17文字で表現するのはとても難しいことだと感じた。
- ・自分のグループでの俳句の発表をし合うことで、自分で感じたその句のイメージや、作者のイメージを知ることができたので、より想像力が深まったと思います。また、他のグループの人の発表も聞いて、人にはそれぞれの発想があり、一つの俳句を見たところで、必ずしも一つだけのイメージとは限らないことが分かりました。
- ・俳句は読む人によってとらえ方が違うと思いました。また語順を変えたりすることでイメージが変わってくるなと思いました。自分の句についてはいろいろなイメージをもたれました。自分が考えてもいないイメージも分かって、たくさんのイメージがうまれて良かったと思いました。
- ・私は今回初めて俳句を作りました。自分の気持ちを17文字に込めるとするのはとても難しく、ストレートすぎて何を伝えたいのかわからなくなったりしました。けれど、人が作った俳句を見たり聞いたりするのは楽しく、おもしろかったです。
- ・今回の俳句の授業で、俳句を作るのがとても楽しかった。その季節にあった季語を盛り込み、それに対する思いをたった17の文字に忍ばせる。気持ちは明確にせず、でも隠すこともせずに表すという俳句の心構えが、自分によくあって楽しかった。

自分でも句を創作してみよう

まだ言葉になっていない自分の内面にある感情や思い…
それらを、十七文字という「省略した」余白「の世界」俳句で伝えよう！

感情

は省略してはいけない！

十七文字への省略作業をする前に…

へ伝えたいこと

音が言葉は、ていつ

十文字、いさ間

十文字、水、ゆく

へまじ話

草・花火・せいの声・夕焼・寮

花火が真夜中、想い出である

花火が真夜中、想い出である

十文字、夜空

十文字、間空に

はじけてとける 花火かな

句

間空に はじけてとける 花火かな

音や声	花火が真夜中に打ち上げられる音
色	花火の火薬と夏の夜空
風景	夏の夜空に色とりどりの花火が打ち上がり、最後は煙が空に漂い、間空にとけていく。
色	紺色、深い黒、赤や黄色やオレンジ色などの色

伝えたい思い

音は、いままで、張、てきたことが、終わ、て今の自分から、遠ざかり、相応い出とな、ていく。

自分でも句を創作してみよう

まだ言葉になっていない自分の内面にある感情や思い…
それらを、十七文字という「省略した」余白「の世界」俳句で伝えよう！

は省略してはいけない！

十七文字への省略作業をする前に…

夏の日の夕方の時、日や落ちる音が、おどろいて、子供の声やカラスの声、虫の音が、夕焼に照らされながら、響きこくる。

夕焼の音、外から聞こえる間空に響く。

私もそのころは、夕焼に照らされながら、近所の子供と遊んだなあ。

句

夕焼のおれんじ空に響く声

音や声	子供たちの声、夕焼の音、カラスの音、虫の音
色	外から帰った子供のおれんじ色の空
風景	夕焼に照らされながら、子供たちは遊ぶ、おどろいて、お母さんたちが話している。
色	オレンジ

伝えたい思い

趣のある風景

3年3組 吟じます！（みんなの俳句作品）

① A 炎天下 我を忘れて 追いかける

B 梅雨晴れの まぶたの裏に 富来の海

C 踏み切って 青空の青に ただひとり

D 雨多し 梅雨明けののが 待ち遠し

② A 終わりになき 大名行列 梅雨明けに

B わたし買い 手紙が渡す 父の日夜

C こいのぼり 遠くなりゆく 子供時代

③ A 夏空に 飛び立つ鳥と 同じかな

B すき透る 海月と同じ 我が心

C 伸びていく 太陽追って ひまわりが

D 風鈴と 風の音色に ウトウトと

④ A 夢の中 ゆらゆら光る 螢かな

B 暑い夏 空を見れば 風が吹く

C 梅雨すぎて 辺りはようやく 夏の色

D 宿題の 背後に響く 蝉の声

⑤ A 夏暑き すぎゆく日々に 葉さす

B 炎天下 たかなる胸に 夢のせて

C 夏雨に うたれて咲いた 一輪の花

D 暑き日の 浴衣姿に つられけり

⑥ A 夏の色 まだ私には 似合わない

B 炎天下 誰よりも遠く あの場所へ

C 夏休み かいいた汗だけ うまくなる

D ねらいうち 今度はキメるぜ 朝バナナ

⑦ A 向日葵の 太陽^はの笑顔に さそわれて

B 夏の朝 うるさい声で 目が覚める

C 入道雲 はてなき青を いざ進まん

D 下じきを あおいで感じる 薔薇の花

⑧ A 打ち水に 涼しさ感じる 石畳

B 山開き 頂上めざして 一歩ずつ

C 夏の朝 しずくが光る いえの庭

D 夏あつし わざわざ外へ 駆けて行く

⑨ A 秋近し 眠れぬ夜に 別れ告げ

B ひまわりの 光のまぶしさ 日もかすむ

C さみしさよ 梅雨の宙より 身を冷やす

D 暑い中 汗ふきながら 走り出す

⑩ A 南吹く 闊志抱いて 夢むかう

B 気がつけば 夏の空に魅入られる

C 月の下 花火見て知る 夏来たり

D 扇風機 机のうしろで 風そよぐ